



雅楽と国際化

雅楽を知っていると、日本文化を鑑賞する際、理解が深まります。例えば、雅楽は平安貴族の嗜みの一つですから、平安文学に出てくる音楽は楽曲も楽器も全て雅楽のものです。『源氏物語』には貴族が雅楽を演奏する場面が数多く出てきますし、登場する楽曲は全て実在します。ですから、笙がどんな楽器で、どんな音色を嵐すのかを知っていれば、理解も深まります。

一例を言うと、「若紫」巻で光源氏は北山で最愛の妻となる紫の上と出会います。帰京の日、迎えに来た頭の中將の一行と管弦の宴をすることになり、隨身が箏を吹きます。この場面を読む時、箏の切ない音色を知っていれば、光源氏的心情を音楽で表そうとする紫式部の意図に気づきますし、「本当に切ない別れの場面だな」と想像しやすくなります。すると、「紫式部は、どの場面で、どの楽曲や楽器を、どう演奏させたか」という演出にまで踏み込んだ読み方ができるようになります。そして楽器や楽曲だけではなく、小物や衣装の色など全てに意味があることに気づきます。それに気づくのと気づかないのとでは、作品の理解度が違ってくるわけです。

今や外国人のほうが日本文化に詳しく、彼らに質問されて返答に窮する日本人も多いようです。しかし、雅楽に限らず、お茶でもお花でも、何か一つ日本文化をきちんと体得していれば、外国人に尋ねられた時、堂々と胸を張ってられるでしょう。

近年、国際化が叫ばれますが、私は「何ををもって国際人と言うのか」とよく考えます。英語が流暢なことでしょうか。私自身、帰国子女だから分かるのですが、外国人は日本人に語学力なんて求めていません。

外国人から「歌舞伎音楽と雅楽の違いは何ですか」と質問された時、それらを聴いたことがないと言葉が出てきません。その場合、その外国人は、語学はできなくても良いから、日本文化に造詣の深い日本人を探すでしょう。通訳を介せば知りたい中身を引き出せるからです。その瞬間、英語のできない人でも対等になれる。自国の文化を知る人が国際人です。「国際人とは語学力ではなく、文化力だ」と私は思っています。

外国人は日本人に語学力を求めています。「文化と接したい」「日本を肌身で感じたい」と願っているのです。例えば、何でもありませんが、「畳の上に布団を敷いて寝てみたい」という人もいれば、「日本人は皆、こたつに入ってミカンを食べるのですか」と尋ねる人もいます。「それを英語で説明してくれ」という外国人は一人もいません。「見たい」「触りたい」「体験したい」という人がほとんどです。こういう時、日本文化を知らなければ、コミュニケーションは始まりません。

私が残念に思うのは、公立小学校のカリキュラムに英語が加わったことです。そんな時間があるなら、雅楽やお茶や生け花の先生を学校に呼んで、それらを日常的に体験させるべきです。そうやって自然に日本文化を会得した子供が、やがて大人になって外国に目を向け、外国人と接したくなった時、語学を学べば良いのです。「伝えるべきものを会得してから語学を学ぶ」という順番が大事です。ただ語学ができて、伝えるのがなければ意味がありません。

*

最後の一文は全く同感である。